

特別寄稿

宮部先生を想う

平成遠友夜学校 佐藤政雄

北大附属図書館 4 階で大学文書館第 1 回企画展示として「台湾に渡った北大卒業生たち II. 生産・技術と植物学・農学」が開催されました(2011 年 3 月から 5 月)。その展示資料によると、植物学者川上瀧彌は現在も台湾の人々にその業績を高く評価されています。初代館長として総督府博物館(現在の国立台湾博物館)の基礎を築いたのは川上瀧彌でした。阿寒湖のマリモは川上瀧彌によって 1898(明治 31)年に命名されました。

私は 1931(昭 6)年生まれです。大叔父の川上瀧彌が宮部金吾先生の書生をしていました。そのような関係で宮部金吾先生のことを良く存じております。日本茶をご馳走になったこともあります。先生の一番の好物はうなぎの蒲焼でした。

私が 2 歳のとき父がなくなりました。それで母の実家に住むことになりました。大祖父は川上瀧彌の兄でした。母親は道庁の北隣の北 4 条西 7 丁目の博士町に住んでおりました。地質学者の佐々保雄先生や昆虫学者の河野廣道先生も隣同士でした。

川上瀧彌は 1891(明 24)年札幌農学校本科に第 18 期生として入学しました。その頃札幌農学校では教授は書生を置きまりがあり、瀧彌は植物に詳しい関係で宮部先生の書生となりました。

宮部先生の門下生として川上瀧彌は顕花植物を阿寒、利尻島、そして択捉島の植物を研究、卒業後は台湾に渡りました。牧野富太郎博士が札幌にお見えのときは宮部先生宅をお宿とされていたようです。

納豆博士として有名な半澤洵先生と川上瀧彌は親友でした。川上瀧彌は 1915(大 4)年 44 歳で他界しました。

宮部先生の弟子の伊藤誠哉先生が学長だった 1951(昭 26)年にイールズ事件が起きました。

園芸学の大家で、日本にメンデルの法則を紹介したことで知られている星野勇三は山形県出身で川上瀧彌の実家も山形県でした。星野勇三は拙宅にみえて母親に袴のすそを修理してもらった時もありまし

た。そのような関係で星野勇三宛の手紙が拙宅に保管されていました。これを先日の文書館で開催された展示に使用していただきました。

新渡戸稲造宅の墨絵が文書館第 1 回企画展示で公開されましたが、これを書いたのは川上瀧彌でした。札幌農学校 2 代目校長森 源三の息子森 廣氏と共に小雑誌「はな」を宮部夫人に捧げています。あの広大な知事公館の所に森 廣氏の家がありました。森 廣氏は川上瀧彌の親友です。

宮部家と松浦武四郎の家は江戸下谷のごく近いところにあり、両家は互いに行き来していたことから、幼少の宮部先生は、武四郎が宮部家に寄贈した著書にあるエゾの草花類や鳥獣などの絵を見て、子供心に遠いエゾ地に対してあこがれを持っていたようです。

宮部先生の奥様は 30 代で亡くなりましたが、宮部先生は 92(満 90)歳で亡くなるまでお一人を続けられました。盛岡の医者の子の一郎さんが義息子とされました。

私が札幌市立幌西小学校の 1 年から 3 年生までの担任は、後の衆議院議員の横路節雄先生でした。バケツを持って廊下に立たされたこともありました。懐かしい思い出です。

1895(明 28)年、大叔父川上広衛は日清戦争のとき兵士として出陣し、中国での余暇に植物採集をしました。130 点余りを弟の瀧彌に送附し、満州植物として発表されました。

宮部先生の書齋を見せていただいたことがあります。上には本棚、下は引き出しとなっていました。中を覗いてみるとお弟子さんの研究報告書がアイウエオ順に整理整頓されていました。教える教材や関係ある報告書などが迷いも無くするすると出てくるのは驚きでした。人にはできない几帳面さがにじみ出ていました。学問にも信仰にも一本の筋を通しておられました。

遠友夜学校の開設に当たっては当時アメリカ在住

の新渡戸稲造先生から宮部先生に敷地手配を御願
いしますと連絡が来ていました。それで 1894(明 27)
年に札幌市南 4 条東 4 丁目に独立教会の日曜学校
が開設されていたところを買うことによって土地が用
意されました。このように宮部先生の協力があつた
ので遠友夜学校は開設されることになったのです。
その後、学生だった高倉新一郎先生など多くの学生
や教員が教師などを担当し、経済的にも協力してい
ました。その中には、後に学士院会員になった人が
9 名おりました。宮部先生は遠友夜学校が解散する
1944(昭 19)年まで理事として尽力され、札幌市民の
ためにその高貴な使命を果されました。

1883(明治 16)年に開拓使から帰校された宮部先
生は植物園の開設を命じられました。第 18 期生は
ボランティアで日高奥地や天塩奥地から原木を植物
園に移動するお手伝いをしました。また、終戦間もな
くのところ進駐軍が植物園の中に道路をといてきま
したが、宮部先生はこの申し出をきっぱりと断りまし
た。そのような苦労があつて、現在の植物園にある
原始林は在りし日の蝦夷の昔をしのばせる憩いの
空間として維持されているのです。

宮部家に瀧彌が書生をしていた 1936(昭 10)年に
広衛は農学部入り口ホールの大時計を設置しまし
た。また、大通り公園の花壇は星野勇三さんのアイ
デアで始められました。

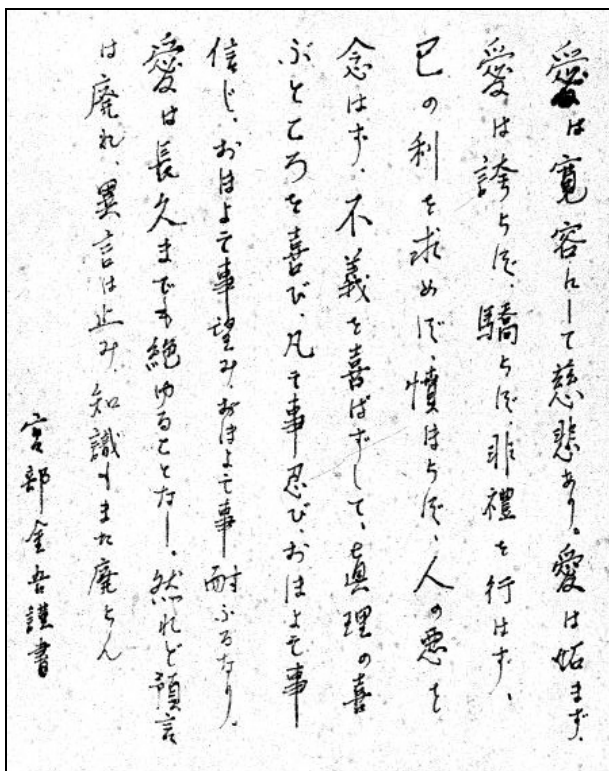
宮部先生が 92(満 90)歳のとき一番好きな聖句を
色紙に書いてもらいました。毛筆は手が震えて上手

くないのでペンで記しましょうと書いてくださいま
した。この聖句は宮部先生の生涯の指針でした。第
2 期生のお話をいろいろ聞いたり、学問と信仰のお
話もお聞きし、本当に良い時を与えられました。この
ことに感謝し、今も大切に色紙を保管しています。そ
れが写真のものです。宮部先生はこの翌年にこの
世を去られました。

札幌農学校第 2 期生は新渡戸稲造(教育者)、内
村鑑三(思想家)、広井勇(土木工学者)、宮部金吾
(植物学者)らで北海道開拓のみならずその後の日
本の発展に大きな影響を与えました。1949(昭和 24)
年北海道大学名誉教授宮部金吾先生は札幌市名
誉市民第 1 号となられました。先生は北海道大学教
授として学生の教育にあたり、また植物学者として
世界的名声を博し、1946(昭 21)年には本道ではじ
めて文化勲章を授与されました。先生はその本務と
する教育と学術研究のほかに、一市民として、札幌
市の発展につくされました。宮部先生のお墓は札幌
市円山墓地にあります。

参考文献

- 宮部金吾博士記念出版刊行会編(1953)宮部金吾、
岩波書店、1-365。
- 山本美穂子(2011)「我等は花を楽しむ 花は自然の
珠玉」—北海道から台湾へ、未知の植物を求めて
札幌農学校第十八期生 川上瀧彌、季刊リテラポ
リ 45 号、2-3。



宮部金吾先生の肖像写真(上、撮影時期は
不明)と直筆の色紙(左)
この色紙の裏に「1950(昭 25)年 7 月 9 日
佐藤政雄君の為に 90 歳 宮部金吾」と記さ
れています

活動報告・他

調査記録と採取遺物

考古ボランティア 西本結美

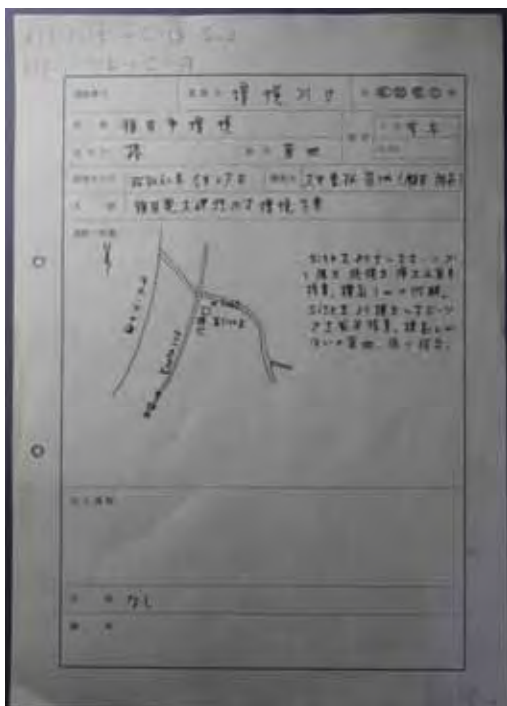
私達考古学ボランティアは、水曜日の夜と金曜日の午前のチームに分かれて活動しています。主な活動内容は、水曜日は調査記録の整理、金曜日は図書の整理で、今日は水曜日の活動について報告します。

1967(昭42)年、北大文学部の北方文化研究施設によって道北から道東にかけての約90箇所での遺跡の分布調査(フィールドワークでしょうか)が行われました。調査対象は、当時すでに認定されていた遺跡や遺構(住居跡・柱跡・炉跡、墓跡などの生活痕)と思われる箇所、あるいは遺物(土器や石器など)を採集した地点で、その一つ一つに調査記録が残されています。それら記録台帳には、名称・おおよその住所・何時代の遺構か・採取した遺物・発見した経緯・位置図などが記載されています。この台帳に記載された位置を現在の地図上に落としていくことが私達の最初の課題でした。位置を特定し、同じく当時書かれた調査日誌と採取してきた遺物の情報を一冊にまとめて、台帳を見た人がこの遺跡・遺構は地図上でどこに位置し、どんな遺物が採取され、日誌から調査時の様子を知ることができる冊子に仕上げることが最終目標です。

位置は、台帳に記された図面を現代の地図上の地形と比べながら特定していくのですが、いかんせん40年前の調査です。台帳の図面上もっとも重要な手掛かりとなる線路が今や廃線で地図上からは消えてしまっていたり、目印が個人宅・「×氏の畑裏」など、よほど詳細な地図があるいは現地に行かなければ特定するのは困難であったりと、なかなか自信を持って位置を落としていくことができませんでした。

調査の際に採取してきた遺物も残されています。それらの遺物は、洗浄と注記(どこから採取してきたかを示す記号)をしたあとは袋に詰められたままになっていました。今、私達はこれらの遺物の写真撮影を行っています。最近では土器の撮影を行っていますが、中には海の向こうのサハリンの土器にみられるのと同じ特徴を持った土器があり、当時どんな交流があったのかと想像を膨らませながら楽しく作業を進めています。

撮影が終わり、冊子が完成したら、いつかそれを片手に調査箇所を辿る旅に出かけられたらいいなと思っています。



写真は遺物台帳(左)と出土遺物(下)の一例



第21回談話会 国蝶オオムラサキ選定論争始末記

講演者：青山慎一（昆虫ボランティア）

編集委員 星野フサ

標記の談話会講演が8月19日(金)に開催されました。参加者は14名でした。

以下は講演概要です。講演では、国蝶選定論争に登場する主な研究者の顔写真、登場する蝶の実物標本や関連する図鑑、蝶の切手なども準備していただき、迫力あるお話でした。

なお、講演で示されたオオルリオサムシ(色違い3種)とオオムラサキ(雄雌各1頭)の標本を青山先生から寄贈していただきました。

ご存知のように、日本の国花はサクラとキク、国鳥はキジです。国蝶は、日本産のタテハチョウでは最大の種であるオオムラサキです。オオムラサキが国蝶に決まったいきさつをお話します。

戦前、蝶類同好者の日本最初の全国組織であり、著名な博物学者のほとんどが入っていた「蝶類同好会」が九州帝国大学農学部(事務局)にありました。

1933(昭8)年(私が生まれる7年前)に、同好会の初代会長である江崎悌三先生が上京したおりに在京の会員たちが歓迎の酒席を設け、その雑談の中で国蝶を決めてはどうかということになりました。

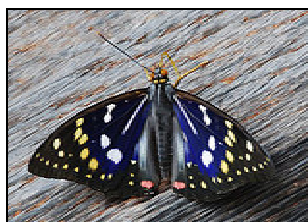
その席では江崎先生提案のオオムラサキと決まり、帰ってから会誌により会員に賛否を問うたところ、大方が賛成しました。そのままオオムラサキに決まりかかったとき、会員の結城次郎氏(数学者)が反論しました。彼は、国蝶を決めるためには以下の条件が必要であるとし、1つは全国土に分布が見られること、2つめには小学校教科書にも載っていること、3つめには飛び方が優雅であること、としました。そして、この3つの条件をかなえるナミアゲハこそが国蝶にふさわしいと主張しました。同好会はオオムラサキ派とアゲハ派とに分かれて、激しい紙上論争が起きました。互いに相手をけなし合うという泥仕合になったため、投票で決めようということになりました。その結果は、オオムラサキが78票、ナミアゲハが35票、ギフチョウが1票、アカボシウスバシロチョウが1票、アサギマダラが1票でした。オオムラサキは圧勝でしたが、投票総数が議決の約束である全会員の過半数に届かなかったため、投票は無効となり、決着はつきませんでした。4年間論争したにも

かかわらず、このような結果となりました。その頃、日本は第二次世界大戦に向かっており、同好会は解散したため、国蝶論争は消滅しました。

そして、敗戦後の1954(昭29)年に発行された保育社の第1号図鑑(原色日本蝶類図鑑)のオオムラサキの解説文に「…国蝶として昆虫界を賑わして…」と記されました。この図鑑の著者は横山光夫氏でしたが、九州大学の江崎先生が校閲しました。同じ頃、郵政省はチョウを図案化した通常切手の発行を企画し、専属デザイナーの久野実氏に図案を依頼しました。久野氏はチョウについては素人であったため、人づてに研究家として知られる林慶氏に相談しました。当初の候補は特別天然記念物であるミカドアゲハであったが、旧オオムラサキ派のリーダーであった林氏の強い助言で、直前でオオムラサキに替えられたと言われています。1956(昭31)年に発行された額面75円の切手は主に現金書留用に使われましたが、郵政省の切手教材の趣意書には、オオムラサキは「…国蝶としても恥ずかしくない風格をもち…」と記されていました。

このように、旧オオムラサキ派は周到な根回しをした上で、翌年の1957(昭32)年に東京で開かれた日本昆虫学会総会に緊急動議として提案し、オオムラサキを国蝶にしてしまいました。このとき、江崎先生は日本昆虫学会の会長でした。

オオムラサキは、北海道では7月中・下旬から8月初旬にかけて見られる夏の蝶で、幼虫はエゾエノキしか食べないことから分布は限られています。札幌市では円山・三角山・硬石山・藻岩山軍艦岬などで見ることができます。



国蝶 オオムラサキ



8月13日、土曜市民セミナーでの講演「世界の蝶の地理分布 展示解説を主体に」で展示解説をされる青山先生(右端)

談話会報告 2

第22回談話会 そば打ち実演と新そば堪能会

地学ボランティア 在田一則

今回(10月7日)は、地学ボランティアの寺西さんのご紹介で、これまでの談話会とは趣向を変えて実演、それもNHKの朝の連続ドラマ「おひさま」でおなじみの“そば打ち”の実演とその成果品の堪能という企画でしたが、残念ながら参加者は7名と少なかったです。しかし、あっと驚くびっくりがあり、大盛会でした。

手違いにより、そばは既に打ち上がって持って来られたので、そば打ちの実演を見ることはできませんでした。しかし、“夢明塾”の皆さん(鴨沢・佐々木・高橋・松田の皆さん)による黒松内町の新そば粉を使ったそばは美味でした。2ミリほどの太さに見事にそろったそばを見るにつけ実演を見られなかったのは残念でした。そろいのTシャツとボランティア控室のドアに掲げられた蕎麦道場夢明塾と染め抜いた暖簾が雰囲気を出していました。夢明塾とはそば打ち愛好者20名ほどの集まりだそうです。皆さん前期高齢者とお見受けしました。

驚いたのは、食べ終わった頃、そろそろいいですかと云って、夢明塾がフォルクローレグループ“ロス・ヤチシンコス”に変身して始まったインカ民族音楽の演奏です。最初に、ケーナ(リコーダのような縦笛)・

サンポーニャ(数本の葦の管からなる管楽器、笙のような笛)・ギター・ボンボ(リマ?の皮の太鼓)・チャフチャス(打楽器、リマの爪)などの楽器の紹介がありました。ケーナにはいろいろ音色や高低の異なる数種がありました。演奏曲はエル・コンドル・パサ(コンドルは飛んでいく)、エル・アンティガル、ツクマンの月、オウロベルデ(緑の黄金)、ジャキルナ(哀しい男)、灰色の瞳で、いずれもよく知られた曲です。曲の説明もあり、最後はおなじみの花祭りで7時に終演となりました。楽器演奏、歌(もちろん原語)ともに素晴らしく、失礼ながらプロ級で、そば打ちよりも年期が入っているように感じました。廊下を通りかかった人の中には開いたドアのところでしばらく聞き入っている人もいました。

ネットでロス・ヤチシンコスと検索してみると、あちこちで演奏しているようです。因みに、“ヤチシンコ”とは乾地・湿地・岩礫地など劣悪な環境に耐えて生育するアカエゾマツのなかで、湿地帯に自生しているものをいうそうですが、それによるグループ名なのかな?

来年、Music in Museumのウッドステージでの演奏を聴きたいです。



「夢明塾」変身“ロス・ヤチシンコス”の演奏風景

博物館訪問記

第6回 博物館に押しかけよう 円山動物園バックヤード見学会に参加して

図書ボランティア 山岸 博子

円山動物園は、1951(昭26)年、ヒグマ・エゾシカ・オオワシ3種類4点の動物で開園しました。今年は開園60周年を迎えます。

その記念の年の2011(平23)年9月11日に、北大卒業の獣医さんで学芸員の千葉さんの興味深い、楽しい解説で、通常は見学出来ない動物園のバックヤードを見学させて頂けたことは、本当に幸せなことでした。ボランティアそして学生さん等、総勢20名でした。まず迎えてくれたのは、マサイキリンのタカヨ象の花子の骨格標本です。(写真1)



写真 1

キリンの首の骨の数とゾウの首の骨の数と同じなのに、びっくり…。キリンの首の骨の間隔は広いので長い首になり、ゾウの骨は間隔がなく並んでいると云う事が骨から分るのだそうです。

その奥には、開園当時、一人の少年から買ったというオオワシの「バーサン」。52年間も凜とした美しい姿で生き、今も尚、剥製となって見守りつづけています。

動物の維持管理の為に飼料館の冷蔵庫には、ひよこ(オス)や、馬肉等、また、ピーマン・レタス・トマト・芋・人参等の野菜やりんご・牛乳などがたくさん。

珍しかったのは、ソーセージ。大きさは、直径5センチ、長さ20センチ位。これは特別に肉食獣の為に作ったもの。例えば、野生のライオンは、シマウマを一頭お尻から食べ始めて、内臓なども食べているが、動物園では筋肉の部分しか与えていないため、栄養が偏ってしまうので、内臓などをソーセージにして与え、調整しているということでした。ゴリラは、煮干しの目を怖がり、目を取ると食べる…ののです。動物の餌代は、年間5千万円も掛るそうです。動物園の年間予算は、14億円。東日本大震災の際は、仙台の動物園に飼料を送って援助したそうで

す。

動物病院には、入院棟や解剖室がありました。もちろんレントゲン、心電図、エコー装置など完備していました。(写真2)



写真 2

一番大変なことは、猛獣の診療です。爪を切るのも大変です。なにしろ、猛獣を抑えることなど出来ませんから。そのためには、手作りの吹き矢で、体重に合わせた麻醉をかけるのですが、その吹き矢を打つのも一仕事。動いている猛獣のお尻の筋肉に打つのは至難の業。近寄ったりも出来ませんから。また、賢い動物は、吹き矢の棒を見ただけで、あるいは、獣医さんを見ただけで、大騒ぎ…。

爬虫類・両生類館は、通路照明の明るさを落として、動物を浮き上がらせて展示していました。また、ヘビなどの健康状態は温度と湿度で管理しています。へびを見ただけではよく分からないので、飼育槽の中に入れてある植物を見て判断しているそうです。

この地下には、餌のために、ねずみとコオロギの繁殖施設があるとのこと。

熱帯動物館は、築40年経って、古くなり、現在新しくアフリカゾーンとアジアゾーンを建設中。冬は寒いので、屋外の展示場と屋内の展示場が必要なのだそうです。キリンの「ななこ」が今年6月に出産して、「なな助」が生まれました。可愛い瞳が印象的でした。

今、動物園では、動物それぞれの特徴を生かし展示する方法や野生の環境を作る方法など、工夫を凝らして動物にも観客にも喜んで貰える動物園作りに取り組んでいます。例えば、横浜のズーラシアは野生の、旭川の旭山動物園は、人工の…というように。円山動物園では、文字や数字を学習するチンパンジー「アイ」の先生として有名な京大霊長類研究

所の松沢哲郎教授にもアドバイスをいただいてチンパンジー館を作ったそうです。

まだ、まだ、書ききれないこと、聴きもらったことがたくさんですが、久しぶり、いえ、何十年ぶりに動物園に行き、こんなに沢山のバックヤードの方々の知

恵と努力に触れ、感激でいっぱいです。

日曜日だったので、園内は親子連れ、若いペアでにぎわっていました。大人でも楽しい円山動物園へ押しかけましょう。

第7回 博物館おしかけよう 北海道立文学館の見学会に参加

図書ボランティア 沼田 勇美

秋も深まった2011(平23)年11月5日(土)の午後、中島公園の一角に有る「北海道立文学館」の見学会に参加。小雨の後でイチヨウ葉が黄色の絨毯のようになった小道を文学館に向かった。この文学館は、どうやら戦前のNHK札幌放送局の跡地に新築した建物らしい。参加者は大原教授を含めて10名であった。

一階の玄関で同館学芸主幹の神明英仁氏から、収蔵品は約30万点あり、毎年数千点寄贈される各種資料は職員やアルバイトにより整理されている。ボランティアは居ないなどの概略の説明があり、主として常設展示の説明をして頂いた。館内は大きく分けて「アイヌ民族の文学」、「北海道の小説・評論」そして「北海道の詩/短歌/俳句/川柳/児童文学」の3分野であった。

アイヌ民族の文学では、北大総合博物館にも展示されている「知里真志保博士」の著書があった。そしてアイヌ神謡集を謡い上げた「知里幸恵」は知里博士の姉だったことを知った。

小説コーナーでは、明治時代の有島武郎などの懐かしい小説家の名前が見られた。更に大正時代へと進むと小林多喜二・伊藤整などが現れるが、日本に

戦争の暗雲が立ち込めた時代だった。戦後は原田康子・三浦綾子・渡辺淳一など、なじみの作家が見られた。北海道の詩人たちは、更科源蔵・河邨文一郎など数々の人が見られた。児童文学では一度北大で話をされた加藤多一さんの名があった。北海道で生まれた作家・詩人・歌人だけでなく、幸田露伴や石川啄木など北海道で過ごしたことがある作家や吉村昭など北海道を舞台とした作品の作家もあった。

札幌出身の作家・素木しづ(画家の上野山清貢と結婚)は、大原先生によると、札幌農学校出身で台湾の農作物害虫の調査・研究で有名な昆虫学者・素木得一の妹であるということであった。

常設展のほか、年4回ほどの特別展や朗読会・文芸講演会・児童を対象とした催しなどいろいろな企画も毎月開催されている。このような情報は同館ホームページ(<http://www.h-bungaku.or.jp/index.html>)で得ることができる。

別室では特別展示「林 静一展」があり、現代の竹久夢二調の少女像が赤い色調で描かれていた。

かくて何時もは、理工系の雰囲気世界にいる私達は、しばし文学の世界に浸った一日だった。

見学風景(左)と参加者一同(右)



「博物館ボランティアの集い 2011」報告

地学ボランティア 在田一則

10月24日・25日に「博物館ボランティアの集い2011」(道民カレッジ連携講座)が開催されました。24日(会場:北海道大学情報教育館)は講演・分科会・シンポジウムで、25日は北海道開拓の村見学会でした。

「博物館ボランティアの集い」は、「博物館ボランティアを主体とする住民の博物館運営への関わり方や博物館のボランティアに対する位置づけ方などを通して、地域における今後の博物館のあり方や博物館活動を通じた住民の生涯学習の進め方などについて、幅広い視野から展望すること」を趣旨として2004年から開催されております。主催は(財)北海道開拓の村と北海道大学高等教育機構高等教育研究部生涯学習計画研究部門で、「北海道開拓の村ボランティアの会」や上記生涯学習計画研究部門大学院公開ゼミである「博物館と生涯学習研究会」の皆さんが会場設定や運営などで活躍されていました。以下は、私が参加した24日の報告です。

午前(財)北海道開拓の村代表理事の木村卓爾氏による主催者挨拶につづき、木村純氏(上記生涯学習計画研究部門長、教授)による講演「博物館

・美術館の学びがもたらす地域文化の創造」があり、午後は5時まで分科会(3つのグループ並列開催)とシンポジウム(各分科会の報告と課題討議)がありました。

参加者は107名(うち開拓の村ボランティアの会などのスタッフが20名)で、87名の一般参加者は道内の博物館・自治体・大学等19団体の職員22名と札幌を中心とした10団体のボランティアでした。道外からも7名の参加がありました。終了後北大北部食堂で懇親会があり、そちらにも大勢が参加していました。

私が出席した分科会第1グループでは、九州国立博物館交流課の上野知彦氏と田中薫氏が事例報告として「アジアと日本の文化交流を担うボランティアの力」をテーマに2004年に開館した国内4番目の国立博物館の紹介と8分野356名のボランティアの活動の紹介や博物館とボランティアの関係などの話がありました。シンポジウムでは、第1グループのほか第2グループ(ふるさとの歴史・自然を掘り起こす博物館活動～美幌博物館活動を支援してくれるボランティア(協力員)の現状)と第3グループ(地域の枠を超え、未来へ活動をつなぐ「アルテ市民ポポロ」)の報告があり、フロアも含めボランティアの役割、活動内容などについて熱心な議論がありました。

参加したボランティアの皆さんは、ほとんどが市町村の博物館・美術館・動物園や郷土資料館(室)などで展示解説や案内を行っているボランティアで、標本作製や収蔵品・資料の整理や収蔵作業が多い北大総合博物館の場合とではボランティアの仕事の内容や指導のやり方、ボランティア同士の交流の様子など異なっているところも多かったですが、生涯学習としてのボランティア活動という観点では同じで、いろいろな意見を聞くことができ、参考になりました。

来年も開催されますので、多くの皆さんが参加されることを望みます。



* ニュース原稿の寄稿、また談話会、見学会などの企画に際して、皆様のご意見、アイデアお待ちしております。

* ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp>

ボランティア・ニュース

編集・発行

北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、沼田、永山、安田、石川)

発行日:2011年12月1日

連絡先

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

Tel: 011-706-4706